

人魚のひいさま

DEN LILLE HAVFRUE

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

はるか、沖合へでてみますと、海の水は、およそうつくしいやぐるまぎくの花びらのように青くて、あくまですきとおったガラスのように澄みきっています。でも、そこは、ふかいのなんのといって、どんなにながく綱つなをおろしても底にとどかないというくらいふかいです。お寺の塔を、いったい、いくつかさねて積み上げたら、水の上までとどくというのでしょうか。そういうふかい海の底に、海のおとめたち——人魚のなかまは住んでいるのです。

ところで、海の底なんて、ただ、からからな砂地があるだけだろうと、そうきめてしまつてはいけません。どうして、そこには、世にもめずらしい木や草がたくさんしげついで、そのじくや葉のしなやかなことといったら、ほんのかすかに水がゆらいだのにも、いっしょにゆれて、まるで生きものがうごいているようです。ちいさいのも、おおきいのも、いろんなおさかなが、その枝と枝とのなかをつうい、つういとくぐりぬけて行くところは、地の上で、鳥たちが、空をとびまわるとかわりはありません。この海の底をずっと底まで行つたところに、海の人魚の王さまが御殿をかまえています。その御殿の壁は、さんごでできていて、ほそながく、さきのがつた窓は、すきとおつたこはくの窓でした。屋根

は貝がらでふけていて、海の水がさしひきするにつれて、貝のふたは、ひとりであいたりしまったりします。これはなかなかうつくしいみものでした。なぜとって、一枚一枚の貝がらには、それひとつでも女王さまのかんむりのりっぱなそうしよくなるような、大きな真珠しんじゆがはめてあるのでしたからね。

ところで、この御殿のあるじの王さまは、もうなが年のやもめぐらしで、そのかわり、年とつたおかあさまが、いつさい、うちのことを引きうけておいでになりました。このおかあさまは、りこうな方でしたけれど、いちだんたかい身分をほこりたさに、しつぽにつける飾りのかきをごじぶんだけは十二もつけて、そのほかはどんな家柄のものでも、六つから上つけることをおゆるしになりませんでした。——そんなことをべつにすれば、たとほめられてよい方でした。とりわけ、お孫さんにあたるひいさまたちのおせわをよくなさいました。それはみんなで六人、そろってきれいなひいさんたちでしたが、なかでもいちばん下のひいさまが、たれよりもきりようよしで、はだはばらの花びらのようにすきとおつて、きめがこまかく、目はふかいふかい海のようにまっ青でした。ただほかのひいさまたちとおなじように、足というものがなくて、そこがおさかなの尾になっていました。

ながいまる一日、ひいさまたちは、海の底の御殿の、大広間であそびました。そとの壁



からは、生きた花が咲きだしていました。大きなこはくの窓をあけると、おさかながつういとはいつて来ます。それはわたしたちが窓をあけると、つばめがとび込んでくるのに似ています。ただ、おさかなは、すぐと、ひいさまたちの所まで泳いで行って、その手からえさをとつてたべて、なでいたわつてもらいました。

御殿のそこには、大きな花園があつて、はでにまっ赤な木や、くらいあい色の木がしげつていました。その木の実は金のようにかがやいて、花はほのおのようにもえながら、しじゅうじくや葉をゆらゆらさせていました。海の底は、地面からしてもうこまかい砂ですが、それは硫黄ゆわうの火のように青く光りました。そこでは、なにかも、ふしぎな、青い光につつまれているので、それはふかい海の底にいますというよりも、なにか宙ちゆうに浮いていて、上にも下にも青空をみているようでした。海のないでいるときには、お日さまが仰げました。それはむらさきの花のようで、そのうてなからながれだす光が、海の底いちめんひろがるようにおもわれました。

ひいさまたちは、めいめい、花園のなかに、ちいさい花壇かだんをもつていて、そこでは、すき自由に、掘りかえすことも植えかえることもできました。ひとりのひいさまは、花壇を、くじらの形につくりました。するともうひとり、じぶんのは、かわいい人魚に似せたほ

うがいいとおもいました。ところが、いちばん下のひいさまは、それをまんまるく、そつくりお日さまのかたちにしらえて、お日さまとおなじようにまっ赤に光る花ばかりを咲かせました。このひいさまはひとりちがつて、ふしぎともものしずかな、かんがえぶかい子でした。ほかのおねえさまたちが、難船した船からとって来ためずらしい品物をならべたててよろこんでいるとき、このひいさまだけは、うつくしい大理石の像をひとつとつて来て、大空のお日さまの色に似た、ばら色の花の下に、それをおいただけでした。それはまっ白にすきとおる石をきざんだ、かわいらしい少年の像で、難破なんぱして海の底にせずんだ船のなかにあつたものでした。この像のわきに、ひいさまは、ばら色したしだれやなぎを植えました。それがうつくしくそだつて、そのみずみずしい枝が像をこして、むこうの赤い砂地の上までたれました。そこに濃こいむらさきの影ができて、枝といっしょにゆれました。それはまるで、こずえのさきと根とがからみあつて、たわむれているようにみえました。

このひいさまにとつて、海の上にある人間の世界の話をきくほど、おおきなよろこびはありません。おばあさまにせがむと、船のことや、町のことや、人間やけもののことや、知っていらつしやることはなにもかも話してくださいました。とりわけ、ひいさまにとつてめずらしくおもわれたのは、海の底ではつけないことなのに、地の上では、お花がお

つているということでした。それと、森がみどり色していて、その森のこずえのなかにおさかなが、高い、かわいらしい声で歌がうたえて、それがきくひとの耳をたのしくするということでした。その、おばあさまがおさかなとおっしゃったのは、小鳥のことでした。だって、ひいさまたちは、小鳥というものをみたことがないので、そういつて話さなければわからないでしょう。

「まあ、あなたたち、十五になったらね。」と、おばあさまはいいました。「そのときは、海の上へ浮かび出ていいおゆるしをあげますよ。そうすれば、岩に腰をかけて、お月さまの光にひたることもできるし、大きな船のおるところもみられるし、森や町だってみられるようになるよ。」

来年は、いちばん上のおねえさまが、十五になるわけでした。でも、ほかのおねえさまたちは——そう、めいめい、一年ずつ年がちがっていきましたから、いちばん下のひいさまが、海の底からあがつていつて、わたしたちの世界のようすをみることになるまでには、まる五年も待たなければなりません。でも、ひとりがいけば、ほかのひとたちに、はじめていった日みたこと、そのなかでいちばんうつくしいとおもったことを、かえって来て話す約束ができました。なぜなら、おばあさまのお話だけでは、どうも物たりなくて、ひい

さまたちの知りたいとおもうことが、だんだんおおくなつて来ましたからね。

そのなかでも、いちばん下のひいさまは、あいにく、いちばんながく待たなくてはならないし、ものしずかな、かんがえぶかい子でしたから、それだけたれよりもふかくこのことをおもいつづけました。いく晩もいく晩も、ひいさまは、あいている窓ぎわに、じつと立つたまま、くらいあい色した水のなかで、おさかながひれやしっぽをうごかして、およぎまわっているのをすかしてみました。お月さまと星もみえました。それはごくよわく光っているだけでしたが、でも水をすかしてみるので、おかでわたしたちの目にみえるよりは、ずっと大きくみえました。ときおり、なにかまっ黒な影のようなものが、光をさえぎりました。それが、くじらがあたまの上をおよいでとおるのか、またはおおぜい人をのせた船の影だということは、ひいさまにもわかっていました。この船の人たちも、はるか海の底に人魚のひいさまがいて、その白い手を、船のほうへさしのべていようとは、さすがにおもいもつかなかつたでしょう。

さて、いちばん上のひいさまも、十五になりました。いよいよ、海の上に出られることになりました。

このおねえさまがかえつて来ると、山ほどもおみやげの話がありました。でも、なか

でいちばんよかつたのは、波のしずかな遠^{とお}浅^あの海に横になりながら、すぐそばの海ぞいの大きな町をみていたことであつたといひます。そこでは、町のあかりが、なん百とない星の光のようにかがやいていましたし、音楽もきこえるし、車や人の通るとよめきも耳にはいりました。お寺のまるい塔と、とがつた塔のならんでるのが見えたし、そこから、鐘の音もきこえて来ました。でも、そこへ上がっていくことはできませんから、ただなにくれと、そういうものへのあこがれで、胸をいっばいにしてかえつて来たということでした。

まあ、いちばん下のひいさまは、この話をどんなに夢中できいたことでしょう。それからというもの、あいた窓ぎわに立つて、くらい色の水をすかして上を仰ぐたんびに、このひいさまは、いろいろの物音とよめきのする、その大きな町のことをかんがえました。するうち、そこのお寺の鐘の音が、つい海の底までも、ひびいてくるようにおもいました。そのあくる年、二ばんめのおねえさまが、海の上へあがって行って、好きな所へおよいでいつていい、おゆるしができました。このおねえさまが、浮き上がると、そのときちょうどお日さまが沈みましたが、これこそいちばんうつくしいとおもつたものでした。大空がいちめん金をちらしたようにみえて、その光をうつした雲のきれいだったこと、とてもそ

れを書きあらわすことばはないといいました。くれないに、またむらさきに、それがあたまの上をすうすう通つてながれていきました。けれども、その雲よりもつとはやく、野のはくちよう」は底本では「はくちよう」のむれが、それはながい、白いうすものが空にただようように、しずんで行く夕日を追つて、波の上をとんでいきました。このおねえさまも、これについてまけずにおよいでいきましたが、そのうち、お日さまはまったくしずんで、ばら色の光は、海の上からも、雲の上からも消えていきました。

また次の年には、三ばんめのおねえさまが上がっていきました。このおねえさまは、たれよりもむこうみずな子でしたから、大きな川が海にながれだしている、その川口をさかのぼつておよいでいつてみました。そこにはぶどうのつるにおおわれたうつくしいみどりの丘がみえました。むかしのお城やしょうえん園が、みごとに茂つた森のなかからちらちらしていました。いろんな鳥のうたいかわす声も聞きました。するうちお日さまが、照りつけて来たので、ほてつた顔をひやすために、たびたび水にもぐらなくてはなりませんでした。水がよんどちいさな入江になつた所で、かわいい人間のこどもたちのかたまつて、あそんでいるのに出あいました。まるはだかで、かけまわつて、ぼちやぼちや水をはねかしました。いっしょにあそぼうとすると、みんなおどろいて逃げていつてしまいました。

するとそこへ、ちいさな、まつ黒な動物がでて来ました。これは犬でしたが、犬なんて、みたことはなかったし、いきなり、はげしくほえかかって来たので、こわくなって、またひろい海へおよいでもどりました。でも、あのうつくしい森もみどりの丘も、それから、おさかなのしつぽももつていなくせに、水におよげるかわいらしいこどもたちのことも、このひいさまは、いつまでもわすれることができませんでした。

さて、四ばんめのおねえさまは、それほどむこうみずではありませんでしたから、そこで、ひろい大海のまんなかに居ずくまっただけでしたが、でもそこがどこよりもいちばんうつくしかったと話しました。もうぐるりいちめん、なんマイルと先の知れないとおくまで見はらせて、あたまの上の青空は、とほうもなく大きなガラス鐘のようなものでした。船というものもみました。でも、それはただ遠くにはなれていて、まるでかめめのようにみえていました。それからおどけものものいるかが、とんぼがえりしたり、大きなくじらが鼻のあなから、しおをふきだして、そのへんいちめん、なん百とない噴水がふきだしたようでした。

こんどは、五ばんめのおねえさまの番になりました。このひいさまは、おたん生日が、ちようど冬のあいだでしたので、ほかのおねえさまたちのみなかったものをみました。海

はふかいみどり色をたたえて、その上に、氷の山がまわりをとりまいて浮いていました。そのひとつびとつが白く光つて、まるで真珠しんじゆの山のようにでしたが、それも人間の建てたお寺の塔よりもずっと高いものだつたといいました。それがまたきみようともふしぎともいいようのないかたちをして、どれもダイヤモンドのようにちかちかかかやいていました。このおねえさまは、そのなかのいちばん大きい山に腰をかけて、そのながい髪の毛を風になぶるままにさせていますと、そのまわりに寄つて来た帆船ほふねの船頭は、みんなおどろいて、船をかえました。でも、夕方になると空は雲でつまれて、かみなりが鳴つたり、いなづまが走つたり、まつ黒な波が大きな氷の山を高くつき上げて、いなづまのつよい光にありました。のこらずの船が帆をおろして、そこには、おそれとおののきとがたかまつていました。けれども、人魚のむすめは、へいきで、ちかちか光る氷の山の上に腰をのせたまま、かがやく海の上に、いなづま形に射かける稲光いなびかりの青い色をながめていました。

さて、こうして、おねえさまたちは、めいめいに、はじめて海の上へ浮かんで出てみた当座とつぎこそ、まのあたりみた、めずらしいもの、うつくしいものに心をうばわれました。けれども、いまは一人まえのむすめになって、いつどこへでも好きかってにいかれるとなると、もうそれも心をひかなくなりました。またうちがこいしくなつて来て、やがて、ひと

月もすると、やはり海の底ほどけしきのいい所はどこにもないし、うちほどけっこうな住居まいはないわ、といいあうようになりました。

もういく晩も、夕方になると、五人のおねえさまたちは、おたがい手を組んで、つながって、水の上へあがつていきました。みんな、どんな人間もおよばないうつくしい声をもっていました。あらしが来かけると、やがて船はしずむほかないことが分かっていますから、みんなして船のそばへおよいでいって、やさしい歌をうたってやりました。海の底がどんなにうつくしいか、だから船人たちはしずむことをそんなにこわがるにはおよばない、そううたってやるのです。でも、そのことばは、人間には分かりません。それをやはりあらしの音だとおもっていました。それにまた、しずんでいくひとたちが、しずみながら海の底をみるなんて、そんなうまいわけにはいかないのです。なぜなら、船がしずむと、それなり船人はおぼれてしまいます。そうして、しかばねになって、人魚の王さまの御殿へはこばれてくるのですもの。

きょうだいたちが、こうして手をつないで、夕方、水の上へあがつていくとき、いちばん下のひいさまだけは、いつもひとりぼっちあとにのこっていました。そうしてみんなのあとをみおくっていると、なんだか泣かずにいられない気持ちになりました。けれども、海

おとめには、涙というものがないのです。そのため、よけい、せつないおもいをしました。「ああ、あたし、どうかしてはやく十五になりたいあ。」と、このひいさまはいいました。「あたしにはわかつている。あの上の世界でも、そこにうちをつくって住んでいる人間でも、あたしきつと好きになれるでしょう。」

するうち、とうとう、ひいさまも十五になりました。

「さあ、いよいよ、あなたも、わたしの手をはなれるのだよ。」と、ごいんきよのおばあさまがおつしやいました。「では、いらつしやい、おねえさまたちとおなじように、あなたにもおつくりをしてあげるから。」

こういつて、おばあさまは、白ゆりの花かんむりを、ひいさまの髪にかけました。でも、その花びらというのが、一枚一枚、真珠しんじゆを半分にしたものでした。それからまだおばあさまは、八つまで、大きなかきを、ひいさまのしっぽにすいつかせて、それを高貴こうきな身分のしるしにしました。

「そんなことをおさせになって、あたし、いたいわ。」と、ひいさまはいいました。

「身分だけにかざるのです。すこしはがまんしなければね。」と、おばあさまは、おつしやいました。ああ、こんなかざりものなんか、どんなにふり捨てたかつたでしょう。おも

たい花かんむりなんか、どんなにほうりだしたかつたでしょう、ひいさまは、花壇に咲いている赤い花のほうが、はるかよく似合うことはわかっていました。でも、いまさら、それをどうすることもできません。

「いつてまいります。」と、ひいさまはいつて、それはかるく、ふんわりと、まるであわのように、水の上へのぼっていききました。

ひいさまが、海の上にはじめて顔をだしたとき、ちょうどお日さまはしずんだところでした。でもどの雲もまだ、ぼら色にも金色にもかかやいていました。そうして、ほの赤い空に、よいの明みょうじょう星が、それはうつくしくきらきら光っていました。空気はなごやかに澄んでいて、海はすっかりないでいました。そこに三本マストの大きな船が横たわっていました。そよとも風がないので、一本だけに帆が上げてあって、それをとりまいて、水夫たちが、帆綱ほつなや帆げたに腰をおろしていました。

そのうち、音楽と唱歌の声がして来ました。やがて夕やみがせまってくると、なん百とない色がわりのランプに火がともって、それは各国の国旗が、風になびいているように見えしました。人魚のひいさまは、その船室の窓の所までずんずんおよいでいききました。波にゆり上げられるたんびに、ひいさまは、水晶のようにすきとおった窓ガラスをすかして、

なかをのぞくことができず。そこには、おおぜい、晴着はれぎを着かぎった人がいました、でも、そのなかで目立ってひとりうつくしいのは、大きな黒目をしたわかい王子でした。

王子はまだ満十六歳より上にはなっていない。ちようどきようがおたん生日で、このとおりさかなお祝をしているしだいでした。水夫たちは、甲板でおどっていました。そこへ、わかい王子がでてくると、なん百とない花火が打ち上げられて、これがひるまのようにかがやいたので、ひいさまはびつくりして、いったん水のなかにしずみました。けれどまたすぐ首をだすと、もうまるで大空の星が、いちどにおちかかってくるようにおもわれしました。こんな花火なんというものを、まだみたことはありませんでした。大きなお日さまがいくつもいくつも、しゅうしゅういいながらまわりました。すばらしくきれいな火魚が青いなかそら中空にはね上がりました。そうして、それがみんな鏡のようにたいらな海の上につりました。それよりか船の上はとてもあかるくて、甲板の上の帆綱ほつなが、ごくほそいので一本一本わかるくらいだ、とみんなはいつていました。でも、まあ、わかい王子のほんとうにりっぱなこと。王子はたれとも握あくしゅ手をかわして、にぎやかに、またにこやかにわらっていました。そのあいだも、音楽は、この晴れがましい夜室にひびきつづけました。夜がふけていきました。それでも、人魚のひいさまは、船からも、そのうつくしい王

子からも、目をはなそうとはしませんでした。色ランプは、とうに消され、花火ももう上がらなくなりました。祝砲もとどろかなくなりました。ただ、海の底で、ぶつぶつごそごそ、ささやくような音がしていました。ひいさまは、やはり水の上ののっかって、上に下にゆられながら、船室のなかをのぞこうとしていました。でも、船はだんだんはやくなり、帆は一枚一枚はられました。するうち、波が高くなって来て、大きな黒雲がわきだししました。遠くでいなづまが、光りはじめました。やれやれ、おそろしいあらしになりそうです。それで水夫たちはおどろいて、帆をまき上げました。大きな船は、荒れる海の上をゆられゆられ、とぶように走りました。うしおが大きな黒山のようにたかくなって、マストの上のしかかろうとしました。けれど、船は高い波と波のあいだを、はくちよう」は底本では「はくちよう」のようにふかくくぐるかとおもうと、またもりあがる高潮の上につき上げられてでて来ました。これは海おとめの身にすると、なかなかおもしろい見ものでしたが、船の人たちはどうしてそれどころではありません。船はぎいぎいがたがた鳴りました。さしもが同じような船板も、ひどく横腹を当てられて曲りました。マストはまんなかからぼつきりと、まるであしかなんぞのようにもろく折れました。船は横たおしになって、うしおがどどつと、所かまわず船にながれ込みました。ここではじめて、人魚のひいさま

も、船の人たちの身の上のあぶないことが分かりました。そればかりかじぶんも、水の上におしながされた船のはりや板きれにぶつからない用心しなければなりません。ふと一時、すみをながしたようなやみ夜になって、まるでものがみえなくなりました。するうち、いなびかりがしはじめるとまたあかるくなって、船の上のようすが手にとるようになりました。みんなどうにかして助かろうとあがいていました。わかい王子のすがたを、ひいさまはさがしもとめて、それがちりと目にはいったとたん、船がふたつにわかれて、王子も海のそこふかくしずんでいきました。はじめのうち、ひいさまはこれで王子がじぶんの所へ来てくれるとおもって、すっかりたのしくなりました。でも、すぐと、水のなかでは、人間が生きていけないことをおもいました。そうすると、この王子も死んで、おとうさまの御殿にいきつくほかはないとおもいました。まあ、この人を死なせるなんて、とんでもないことです。そこで、波のうえにただようはりや板きれをかきわけかきわけ、万一、ぶつかってつぶされることなぞわすれて、夢中でおよいでいきました。で、いったん水のそこふかくしずんで、またたかく波のあいだに浮きあがったりして、やっと、わかい王子の所までおよいでいけましたが、王子は、もうとうに荒れくるう海のなかで、およぐ力がなくなっていて、うつくしい目もとじていました。人魚のひいさまが、そこへ

来てくれなかつたら、それなり死ぬところだったでしょう。ひいさまは、王子のあたまを水の上にたかくさき上げて、あとは、波が、じぶんと王子とを、好きな所へはこぶままにまかせました。

そのあけがた、ひどいあらしもやみました。船のものは、木こツぱひときれのこつてはいませんでした。お日さまが、まっかにかがやきながら、たかだかと海のうえにおのぼりになりますと、それといっしょに、王子のほおにもさつと血の気がさしてきたようにおもわれしました。でも、目はとじたままでした。人魚のひいさまは、王子のたかい、りっぱなひたいにほおをつけて、ぬれた髪の毛をかき上げました。こうして見ると、海のその、あのかわいい花壇にすえた大理石の像に似ていました。ひいさまは、もういっぺんほおづけて、どうかいのちのありますようにとねがっていました。たかい、青い山山のいただきに、ふんわり雪がつもって、きらきら光っているのが、ちようどはくちようが寝ているようでした。そのふもとの浜しほぞいには、みどりみどりした、うつくしい森がしげっていて、森をうしろに、お寺か、修道院しゅうどういんかよくわからないながら、建物がひとつ立っていました。レモンとオレンジの木が、その園にしげっていて、門の前には、せいのかいしゆるの木が立っていました。海の水はそこで、ちいさな入江をつくっていて、それは鏡のよ

うにたいらなまま、ずっとふかく、すのところまで入りこんでいて、そこにまつしろに、こまかい砂が、もり上がっていました。ひいさまは、王子をだいてそこまでおよいでいて、ことに、あたまの所をたかくして、砂の上にねかせました。これはあたたかいお日さまの光のよくあたるようにという、やさしい心づかいからでした。

そのとき、その大きな白い建てもののなかから、鐘がなりだしました。そうして、その園をとおつて、わかい少女たちがおおぜい、そこへでて来ました。そこで、人魚のひいさまは、ずつとうしろの水の上に、いくつか岩の突き出ている所までおよいでいって、その陰にかくれました。たれにも顔のみえないように、髪の毛にも胸にも、海のあわをかぶりしました。こうしてきのどくな王子のそばへ、たれがまずやってくるか、気をつけてみていました。

もうまもなく、ひとりのわかいむすめが、そこへ来ました。むすめはたいへんおどろいたようでしたが、ほんのちよつとのあいだで、すぐとほかの人たちをつれて来ました。人魚のひいさまがみていますと、王子はどうとういのちをとりとめたらしく、まわりをとりまいてるひとたちに、にんまりほほえみかけました。けれど、ひいさまのほうへは笑顔えがおをみせませんでした。ひいさまにたすけてもらったことも、王子はまるで知りませんでし

た。ひいさまは、ずいぶんかなしくおもいました。そのうち、王子は、大きな建てもののなかへはこぼれていってしまふと、ひいさまも、せつないおもいをしながら水にしずんで、そのまま、おとうさまの御殿へかえっていききました。

いったいに、いつもものしずかな、ふかくおもい込むたちのひいさまでしたけれど、これからは、それがよけいひどくなりました。おねえさまたちは、この妹が、海の上ではじめて来て来たものがなんであつたか、たずねましたが、ちよつぱりともその話はしませんでした。

晩に、朝に、いくたびとなく、このひいさまは、王子をおいて来た浜ちかく上がつていてみました。園のくだものが実のつて、やがてもがれるのもみました。山山のいただきに、雪の消えるのもみました。けれども、ひいさまは、もう王子のすがたをみることはありませんでした。そうして、そのたんびに、いつもよけいせつないおもいでかえつて来ました。こうなると、ただひとつのたのしみは、れいのちいさな花壇のなかで、うつくしい王子に似た大理石の像に、両腕をかけることでした。けれども花壇の花にはもうかまわなくなりました。それは、路のうえまで茂りほうだいしげつて、そのながくのびたじくや葉を、あたりの木の枝に、所かまわずからみつけましたから、そこらはどこも、おぐらくな



っていました。

とうとう、いつまでもこうしているのが、ひいさまにはたえられなくなりました。それで、ひとりのおねえさまにうちあけますと、やがて、ほかのおねえさまたちの耳にもはいました。でも、このひいさまたちと、そのほかに二、三人の、海おとめたちのほかたれ知るものはなく、そのおとめたちも、ただごく仲のいいお友だちのあいだでその話をしただけでした。ところで、そのお友だちのうちに、ひとり、王子を知っているむすめがありました。それから、あの晩、船の上でお祝のあったこともみていました。そのむすめは、王子がどこから来たひとで、その王国がどこにあるかということまで知っていました。

「さあ、いつてみましょうよ。」と、おねえさまたちは、いちばん下のちいさい妹をさそいました。そうして、おたがい腕を肩にかけて、ながい列を組んで、海の上に着き上がりました。そこは王子の御殿のあるときいた所でした。

その御殿は、クリム色に光をもった石で建てたものでしたが、そのいくつかある大理石の階段のうち、ひとつはすぐと海へおりるようになっていました。平屋根の上には、一だんたかく、金めつきしたりっぱな円屋根まるやねがそびえていました。建物のぐるりをかこむ円柱まるばしらのあいだに、いくつもいくつも大理石の像が、生きた人のようにならんでいまし

た。たかい窓にはめ込んだあかるいガラスをすかすと、なかのりっぱな広間がみえました。その広間の壁には、高価な絹のとぼりや壁かけがかかっていました。壁という壁は、名作の画でかざられていて、みるひとの目をたのしませました。こういう広間のいくつもあるなかの、いちばんの大広間のまんなかに、大きな噴水がふきだして、そのしぶきは、ガラスのまるてんじょう円天井まで上がっていましたが、その天井からは、お日さまがさしこんで、噴水の水と大水すいばん盤のなかにういている、うつくしい水草の上にきらきらしていました。

こうして王子のすみがわかると、それからは、もう夕方から夜にかけて、毎晩のように、その水の上に、妹のひいさまはでてみました。もうほかの人魚たちのいきえない丘ちかくの所までも、およいでいきました。ついには、せまい水道のなかにまでくぐって、そのながい影を水の上に投じている大理石の露台ろだいの下までもいってみました。そこにじいっという、みあげると、わかい王子が、じぶんひとりいるつもりで、あかるいお月さまの光のなかに立っていました。

夕方、たびたび、王子はうつくしいヨットに帆をはって、音楽をのせて、風に旗を吹きなびかせながら、海の上を走らせるところを、ひいさまは見ました。ひいさまは、それを青青としげったあしの葉のあいだからすきみました。すると風が来て、ひいさまの銀い

ろしたながいヴェールをひらひらさせました。たまにそれを見たものは、はくちようがつばさをひろげたのだとおもいました。

夜な夜な、船にかがりをたいて、りように出るりようしたちからも、ひいさまはたびたび、わかい王子のいうわさをききました。そうして、そんなにもほめものになっているひとが波の上に死にかけてただよっているところを、じぶんがすくったのだとおもつてうれしくなりました。それから、あのととき、あの方のおつむりは、なんておだやかにあたしの胸のうえにのつていたことかしら、それをあたしはどんなに心をこめて、ほおずりしてあげたことかしらとおもっていました。そのくせ、王子のほうでは、むろんそういうことをまるで知りませんでした。つい、夢にすらみてはくれないのです。

だんだんに、だんだんに、人間というものが、とうとくおもわれて来ました。だんだんに、だんだんに、どうぞして人間のなかまにはいつていきたいと、ねがうようになりました。人間の世界は、人魚の世界にくらべて、はるかに大きくおもわれました。人間は、船にのつて海の上をとびかけることもできますし、雲よりもたかい山にのぼることもできました。人間のいる国々には森も畑もあつて、それは人魚の目のとどかないとおくまでではしなくひろがっていました。そこで、このひいさまの知りたいことは山ほどあつても、

おねえさまたちのちからでは、そののこらずにこたえることはできません。ですから、おばあさまにうかがうことにしました。このあばあさまはさすがに、上の世界のことをずっとよく知っておいでになりました。上の世界というのは、このおばあさまが、まことにうまく、海の上の国ぐくに名づけたものでした。

「ねえ、おばあさま、人間は、水におぼれさえしなければね、」と、ひいさまはたずねました。「それはいつまでも生きられるでしょう。あたしたち海のそのものようには死なないのでしょ。う。」

「どうしてさ。」と、おばあさまは、おつしやいました。「人間だって、やはり死ぬのですよ。わたしたちよりも、かえって寿じゅみょう命はみじかいくらいです。わたしたちは三百年まで生きられます。ただ、いったん、それがおわると、それなり、水の上のあわになって、おたがいむつまじくして来たひとたちのなかに、お墓ひとつのこしては行けません。わたしたちには、死なないたましいというものが無いのだよ。またの世にうまれかわるといふことが無いのだよ。いわば、あのみどり色したあしのようなもので、いちど刈りとられると、もう二どと青くなることが無い。そこへいくと、人間にはたましいというものがあつて、それがいつまでも生きている、からだか土にかえってしまったあとでも、たましい

は生きている。それが、澄んだ大空の上へのぼって、あのきらきら光るお星さまの所へまでものぼって行くのです。ちょうど、わたしたちが、海の上へうき上がって、人間の国をながめるように、人間のたましいは、わたしたちにととも見られない、知らない神さまのお国へうかび上がっていくのです。」

「なぜ、あたしたち、死なないたましいをさずからなかったの。」と、人魚のひいさまは、かなしそうにいいました。「あたし、なん百年の寿命なんてみんなやってしまったもいいわ。そのかわり、たった一日でも人間になれて、死んだあとで、その天国とやらの世界へのぼるしあわせをわけてもらえるならね。」

「まあ、そんなことをおもうものではないよ。」と、おばあさまはおっしゃいました。

「わたしたちは、あの上の世界の人間なんかより、ずっとしあわせだし、ずっといいものなのだからね。」

「でも、あたし、やはり死んであわになつて、海の上へういて、もう波の音楽もきかれななし、もうきれいな花もみられないし、赤いお日さまもみられなくなるのですもの。どうにかして、ながいいのちのたましいを、さずかるくふうってないものかしら。」

「それはあるまいよ。」と、おばあさまはいいました。「だがね、こういうことはあるそ

うだよ。ここにひとり人間があつてね、あなたひとりが好きになる。そう、その人間にとつては、あなたというものが、おとうさまやおかあさまよりもいいものになるのだね。そうして、それこそありつたけのまごころとなさけで、あなたひとりのことをおもつてくれる。そこで、お坊さまが来て、その人間の右の手をあなたの右の手にのせて、この世も、ながいながいのちの世もかわらない、かたい約束を立てさせる。そうなると、その人間のたましいがあなたのからだのなかにながれこんで、その人間のしあわせを分けてもらえることになる。しかも、その人間はあなたにたましいを分けても、じぶんのたましいはやはりなくさずにもっているというのさ。だが、そんなことはけつしてありっこないよ。だって、この海のその世界でなによりうつくしいものになっているおさかなのしつぽを、地上ではみにくいものにしていくというのだもの。それだけのよしあしすら、むこうはわからないものだから、むりに二本、ぶきような、つかい棒みたいなものを、かわりにつかつて、それに足という名をつけて、それでいいつもりでいるのだよ。」

そういわれて、人魚のひいさまも、いまさらため息しながら、じぶんのおさかなの尾にいじらしくながめ入りました。

「さあ、陽気になりました。」と、おばあさまはいいました。「せつかくさずかること

になつてゐる三百年の寿命です。そのあいだは、好きにおどつてはねてくらすことさ。それだけでもずいぶんながい一生ですよ。それだけに、あとはきれいさっぱり、安心して休めるといふものだ。今夜は宮中舞踏会ぶとうかいをやりましょう。」

さて、この舞踏会が、なるほど、地の上の世界では見られないごうかなものでした。大きな舞踏の間の壁と天てん井じょうとは、あつぽつたい、そのくせ、よくすきとおつたガラスで張りめぐらされてゐました。ばら色や草みどり色した大きな貝がらが、なん百としれず、四方の壁にかけつらねてあつて、そのひとつひとつに、青いほのおの火がともつてゐました。それが広間をくまなくてらした上、壁のそとへながれだす光が、すっかり海をあかるくしました。ですから、大も小もなく、それこそかぞえきれないほどのさかなが、ガラスの壁にむかつておよいでくるのが、手にとるようにみえました。うろこをむらさき紅の色に光らせてくるのもありました。銀と金の色にかがやいてくるものもありました。——ちやうど、広間のまん中のところを、ひとすじ、大きくゆるやかな海のがれがつらぬいてゐる、その上で、男の人魚たちと女の人魚たちが、人魚だけのもつてゐるやさしい歌のふしでおどつてゐました。こんなうつくしい歌声が、地の上の人間にあるでしょうか。あのいちばん下の人魚のひいさまは、そのなかでも、たれおよぶもののないうつくしい声で

うたいました。みんないちどに手をたたいて、その歌をほめそやしました。そのせつな、さすがにこのひいさまも心がうかれました。それは、地の上はもちろん、海のなかにもまたふたりとないうつくしい声を、じぶんがもっていることが分かったからでした。でも、すぐとまた、上の世界のことをかんがえるいつものくせに引きこまれました。あのうつくしい王子のことをわすれることはできませんし、あのひととおなじに、死なないたましいをもつていないことが心をくらしめました。そこで、こつそり、ひいさまは、おとうさまの御殿をぬけだしました。そうして、たれもそこで、歌って、陽気にうかれています、しぶんひとり、れいのちいさい花壇のなかに、しよんぼりすわっていました。そのとき、ひとこえ角^{つのぶえ}笛のひびきが、海の水をわたって来ました。その音^ねをききながら、ひいさまはおもいました。

「まあ、いまごろ、あの方きつと、帆船^{ほふね}をはしらせていらつしやるのね。ほんとうに、おとうさまよりもおかあさまよりもっと好きなあの方が、しじゅうあたしのころからはなれないあの方が、そのお手にあたしの一生の幸福をささげようとねがっているあの方が、あそこにいらつしやるのね。あたし、どうぞして、死なないたましいが手にはいるものなら、どんなことでもしてみるわ。そうだ、おねえさまたちが、御殿でおどっていらつしや

るうち、あたし、海の魔女まじよの所へ行ってみよう。いつもはずいぶんこわいのだけけれど、でもきつと、あの女なら相談相手になつて、いいちえをかしてくれるでしょう。」

そこで、人魚のひいさまは、花園をでて、ぶつぶつあわ立つうず巻の流れのなかへむかつていきました。このうず巻のむこうに、魔女のすまいがありました。こんな道をとるのははじめてのことでした。そこには花も咲いていず、藻草もくさも生えていません。ただむきだしな灰いろの砂地が、うずのながれの所までつづいていて、そのながれはうなりを立てて、水車の車輪のようにくるりくるりまわっていました。そうして、このうず巻のなかにはいつてくるものは、なんでもつかまえて、こなごなにくだいて、ふかいふちに引きこみました。このはげしいうずのながれの、しかもまん中をとおって行くほかに海の魔女の領り分ようぶんにはいる道はありませんし、それも、ながいあいだ、ぶつぶつ煮えて、あわだつているどろ沼をわたって行くよりほかに道はないのです。この沼を、じぶんのすくも田という名で魔女はよんでいました。これを行きつくした奥に、きみのわるい森が茂っていて、そのなかに魔女の住居がありました。その森のなかの木立こだちもやぶも、半分は動物、半分は植物というさんご虫なかまで、それはいわば、百あたまのあるへびが、地のなかから、によろによろわき出ているようなものでした。その一本一本の枝が、ながい、ねばねばした

腕で、くなくなど、さなだ虫のような指が出ていました。そうして下の根もとから枝のずつとさきまで、ふしぶしが自由にうごきました。ですから、海のなかで手につかめるものは、なんでもつかんで、しっかりとそれにからみついて放そうとはしません。人魚のひいさまは、すつかりおびえて、そのまえに立ちすくみました。もうおそろしくて、心臓しんぞうがどきどき波をうって、なんべんもそこから引きかえそうとおもいました。でもまた王子のことと、人間のたましいのことももうと、勇気ができました。ひいさまは、そこでまづ、うるさくまつわるながい髪の毛を、しっかりとあたまにまきつけて、さんご虫につかまらないうようにしました。それから、両手を胸の上で重ねて、おさかなが水のなかをつういとおつきるように、いやらしいさんご虫どもが、くなくなした指と腕とをのぼそうとしているなかをつつきって行きました。まあ、このいやな虫は、みると、そのひとつひとつが、そのつかんだものを、まるでつよい鉄の帯でしめつけるように、そのなん百とないちいさな腕で、ぎりぎりつかまえていました。海でおぼれて、このふかい底までしずんだ人間が、白骨になって、さんご虫の腕のあいだにちらちらみえていました。船のかいや箱のようなものまでも、さんご虫はしつかりつかまえていました。おかの動物の骨もありませんが、人魚のむすめがひとり、つかまってしめころされているのが、なかでもおそろしいこ

とおもわれました。

やがて、ひいさまは、森のなかの広場のぬるぬるすべる沼のような所へ来ました。そこには脂ぶとりにふとつた水へびが、くねくねといやらしい白茶しらちゃけた腹をみせていました。この沼のまんなかに、難船した人たちの白骨でできた家がありました。その家に、海の魔女はすわっていて、一ぴきのひきがえるに、口うつしでたべさせているところでしたが、そのようすは、人間がカナリヤのひなにお砂糖をつつかせるのに似ていました。あのいやらしく、肥ぶとりした水へびを、魔女はまた、うちのひよつ子と名をつけて、じぶんのぶよぶよ大きな胸の上で、かっつてにのたくらせていました。

「ご用むきはわかつているよ。」と、海の魔女はいいました。「ばかなことかんがえているね。だが、まあ、したいようにするほかはあるまい、そのかわり、べつぴんのおひいさん、その男ではさぞつらいめをみることだろうよ。おまえさん。そのおさかなのしつぽなんかどけて、かわりに二本のつつかい棒をくつつけて、人間のようなかっこうであるきたいのだろう。それでわかい王子をつつて、ついでに死なないたましいまで、手に入れようつてのだろう。」

こういって、魔女はとんきような声をたてて、うすきみわるくわらいました。そのひび

きで、かえるもへびも、ころころところげおちて、のたくりまわっていました。

「おまえさん、ちょうどいいときに来なすったよ。」と、魔女はいいました。「あしたの朝、日が出てしまうと、もうそのあとでは、また一年まわってくるまで、どうにもしてあげられないところだったよ。では、くすりを調ちようじう合ごうしてあげるから、それをもって、日の出る前、おかの所までおよいでいって、岸が上がって、それをのむのだよ。すると、おまえさんのそのしつぽが消えてなくなつて、人間がかわいい足と、名をつけているものにちぢまる。だが、ずいぶん痛かろうよ。それはちようど、するどいつるぎを、からだにツこまれるようだろうよ。さて、出あつたものは、たれだつて、おまえさんのことを、こんなきれいな人間のむすめを見たことがないというだろう。おまえさんが浮くようにかく足をはこぶところは、人間の踊り子にまねもできまい。ただ、ひと足ごとに、おまえさん、するどい刃物をふむようで、いまにも血がながれるかとおもうほどだろうよ。それをみんながまんするつもりなら、相談にのつて上げる。」

「ええ、しますわ。」と、人魚のひいさまは、声をふるわせていいました。そうして、王子のことで、それから、死なないたましいのことを、しっかりとおもっていました。

「でも、おぼえておいで。」と、魔女はいいました。「おまえさんは、いちど人間のかた

ちをうけると、もう二どと人魚にはなれないのだよ。海のなかをくぐって、きょうだいたちのところへも、おとうさんの御殿へもかえることはできないし、それから王子の愛情にしても、もうおまえさんのためには、おとうさんのこともおかあさんのこともわすれて、あけてもくれてもおまえさんのことばかりを、かんがえていて、もうこの上は、お坊さんにたのんで、王子とおまえさんとふたりの手をつないで、晴れてめおととよばせることにするほかない、というところまでいかなければ、やはり、死なないたましいは、おまえさんのものにはならないのだよ。それがもしかちがつて、王子がほかの女と結婚するようなことになる、もうそのあくる朝、お前さんの心臓しんぞうはやぶれて、おまえさんはあわになつて海の上にくくのだよ。」

「かまいません。」と、人魚のひいさまはいいました。けれど、その顔は死人のように青ざめていました。

「ところで、おまえさん、お礼もたつぷりもらわなきやならないよ。」と、魔女はいいました。「どうして、わたしのぞむお礼は、お軽けいしょう 少なすくなことではないよ。おまえさんは、この海の底で、だれひとりおよぶものがないうつくしい声をもっておいでだね。その声で、たぶん、王子をまよわそうとおもっているのだろう。ところが、その声をわたしはもらい

たいのだよ。そのおまえさんのもっているいちばんいいものを、わたしのだいじな秘薬ひやくと
ひきかえにしようというのさ。なにしろそのくすりには、わたしだって、じぶんの血をま
ぜなくてはならないのだからね。それで、くすりにも、もろ刃のつるぎのようなするどい
ききめがあらわれようというものさ。」

「でも、あたし、声をあげてしまったら、」と、ひいさまは、いいました。「あとになに
がのこるのでしょうか。」

「なあに、まだ、そのうつくしいすがたが、」と、魔女はいいました。「それから、その
かるい、うくようなあるきつきが、それから、そのものをいう目があるさ。それだけで、
りっぱに人間のこころをたぶらかすことはできようというものだ。はてね、勇気がなくな
ったかね。さあ、その舌をお出し、それを代金にはらってもらう。そのかわり、よくきく
くすりをさし上げるよ。」

「ええ、そうしてください。」と、人魚のひいさまはいいました。そこで、魔女は、おな
べを火にかけて、魔法のみぐすりを煮はじめました。

「ものをきれいにするのは、いいことさ。」と、魔女はいつて、へびをくるくるとむすび
こぶにまるめて、それでおなべをみがきました。それからじぶんの胸をひっかいて、黒い

血をだして、そのなかへたらしこみました。その湯気が、なんともいえないふしぎなきみのわるい形で、むくむくと立って、身の毛もよだつようでした。

魔女はしじゅうそれからそれと、なにくれとおなべのなかへ投げ込んでいました。やがて、ぼこぼこ煮え立つてくると、それが*わにの泣き声に似た音を立てました。とうとう、のみぐすりが煮え上がりましたが、それはただ、すみ切った水のようにみえました。

*わにはこどもの泣声に似た声をだしておびきよせるといふ西洋中世のいいつたえがある。

「さあ、できましたよ。」と、魔女はいいました。

そこで、のみぐすりをわたして、代りにひいさまの舌を切りました。もうこれで、ものもいえず、歌もうたえない、おしになったのです。

「もしか、かえりみちに、森のなかをとおって、さんご虫どもにつかまりそうになったらね。」と、魔女はいいました。「このくすりをたった一てきでいい、たらしておやり、そうすると、やつら、腕も指もばらばらになってとんでしまう。」

けれど人魚のひいさまは、そんなことをしないですみました。さんご虫は、ひいさんの手のなかで、星のようにきらきらするのみぐすりをみただけで、おじけて引っこみまし

た、それで、苦もなく、森もぬけ、すくも田もおつて、うずまきの流れもくぐつてかえりました。

そこに、おとうさまの御殿がみえました。大きな舞踏ぶとうの間まも、もうあかりが消えていました。きつともう、みんな寝たのでしょう。けれど、ひいさまも、いまはもうおしでしたし、このまま、ながいおわかれをしようというところでしたから、おねえさまたちを、さがしにはいつていこうとはしませんでした。もう、せつなくて、胸がはりさけるようでした。そつと、花園にはいつて、おねえさまたちの花壇から、めいあい、ひとつずつ花をつみとつて、御殿のほうへ、指で、もうなんべんとしれないほど、おわかれのキツスをなげたのち、くらいあい色の海をぬけて、上へ上がつていききました。

ひいさまが、王子のお城をみつけて、そのりっぱな階段を上がつていったとき、お日さまはまだのぼつていませんでした。お月さまだけが、うつくしくさえていました。人魚のひいさまは、やきつくように、つんとつよいくすりをのみました。すると、きゃしゃなふしぶしに、するどいもろ刃のつるぎを、きりきり突きとおされたようにかんじて、それなり気がとおくなり、死んだようになってたおれました。やがて、お日さまの光が、海の上にかがやきだしたとき、ひいさまは目がさめました。とたんに、切りさかれるような痛

みをかんじました。けれど、もうそのとき、すぐ目のまえには、うつくしいわかい王子が立っていました。王子は、うるしのような黒い目でじっとひいさまをみつめていました。はつとして、ひいさまは目を伏せました。すると、あのおさかなのしつぽは、きれいになくなつていて、わかいむすめだけしかないような、それはそれはかわいらしい、まつ白な二本の足とかわっているのが、目にはいりました。でも、まるつきり、からだをおおうものがないので、ひいさまは、ふつきりとこくながい髪の毛で、それをかくしました。王子はそのとき、いったい、あなたはたれかどこから来たのかと行って、たずねました。ひいさまは、王子の顔を、やさしく、でも、あくまでかなしそうに、そのこいあい色の目で見あげました。もう、口をききたくもきけないのです。そこで、王子はひいさまの手をとつて、お城のなかへつれていきました。なるほど、魔女があらかじめいきかせていたように、ひいさまは、ひと足ごとに、とがった針か、するどい刃ものの上をふんであるくようでしたが、いさんで、それをこらえました。王子の手にすがって、ひいさまは、それこそシャボン玉のようにかかるく上がつていきました。すると、王子もおつきの人たちもみんな、ひいさまのしなやかな、かるい足どりをふしぎそうに見ました。

さて、ひいさまは、絹とモスリンの高価な着物をいただいで着ました。お城のなかでは、



たれひとりおよぶものないうつくしきでした。けれど、おしで、歌をうたうことも、ものをいうこともできません。絹に金のぬいとりした着物を着かざったうつくしい女のどれいたちがでて来て、王子と、王子のご両親の王さま、お妃さまきさきのご前で歌をうたいました。そのなかでひとり、たれよりもひとときわじょうずによくうたう女があつたので、王子は手をたたいてやって、そのほうへにつこりわらいかけました。でも、人魚のひいさまは、じぶんなら、はるかずつといい声でうたえるのにとおもって、かなしくなりました。そこで、「ああ、王子さまのおそばに来たいばかりに、あたしは、みらいえいごう、声をひとにやっってしまったのです。せめて、それがおわかりになったらね。」と、ひいさまはおもっていました。

こんどは、女のどれいたちが、それはけっこうな音楽にあわせて、しとやかに、かるい足どりで、おどりました。すると、人魚のひいさまも、うつくしい白い腕をあげて、つま先立ちして、たれにもまねのならないかるい身のこなしで、ゆかの上をすべるようにおどりあるきました。ひとつつひとつ、しぐさをかさねるにしたがって、この人魚のひいさまの世にないうつくしさが、いよいよ目に立ちました。その目のはたらきは、どれいたちの女の歌とくらべものにならない、ふかいいみを、見る人びとのところに語っていました。

そこにいた人たちは、たれも、酔ったようになっていました。とりわけ、王子は、ひいさまの名を「かわいいひろいむすめさん」とつけてよろこんでいました。ひいさまは、いくらでもおどりつづけました。そのくせ地に足がふれるたんびに、するどい刃ものの上をふむようでした。王子は、いつまでもじぶんの所にいるようにと行って、すぐじぶんのへやのまえの、びろうどのしとねにねることをゆるしました。

王子は、ひいさまを馬にのせてつれてあるけるように、男のお小姓こしやうの着る服をこしらえてやりました。ふたりは、いいにおいのする森のなかを、馬であるきました。すると、みどりのこい木の枝が、ふたりの肩にさわったり、小鳥たちが、みすみずしい葉かげで歌をうたいました。ひいさまは、王子について、たかい山にもものぼりました。そんなとき、きやしやな足から血がながれて、ほかのひとたちの目につくほどになっても、ひいさまはわらっていました。そうして、どこまでも王子にくつついて行って、雲が、よその国へわたっていく鳥のむれのように、とんでいるところを、はるか目のしたにながめました。

うちで、王子のお城のなかにいるとき、夜な夜な、ほかのひとたちのねむっているあいだに、ひいさまは、大理石の階段のうえに出ました。そうして、もえるような足を、つめたい海の水にひたしました。そうしているうち、はるか下の海のもの、わかれて来たひ

とたちのことが、こころにうかんで来ました。

そういう夜のつづいてるとき、ある晩、夜ぶかく、人魚のおねえさまたちが、手をつなぎあつてでて来ました。波のうえにうきながら、おねえさまたちは、かなしそうにうたいました。ひいさまが手まねきして知らせると、むこうでもみつめて、あちらでは、みんな、どんなにさびしがっているか話してきかせました。それから、毎晩のように、このおねえさまたちはでて来ました。いちどなどは、もう何年とないひさしい前から、海の上にておいでにならなかつたおばあさまの姿を、とおくでみつめました。かんむりをおつむりにのせたおとうさまの人魚の王さまも、ごいつしよのようでした。おばあさまも、おとうさまも、ひいさまのほうへ手をさしのべましたが、おねえさまたちのようには、おもいきつておか近くへ寄りませんでした。

日がたつにつれて、王子はだんだん人魚のひいさまが好きになりました。王子は、心のすなおな、かわいいこどもをかわいがるように、ひいさまをかわいがりました。けれど、このひいさまを、お妃きでかけがしようなんといふことは、まるつきりこころにうかんだことがありません。でも、ひいさまとしては、どうしても王子のおよめにしていただかなければ、もう死なないたましいのさずかるみちはありません。そうして、王子がほかのお妃をむか

えた次の朝、海のあわになつてきえなければなりませんでした。

「わたくしを、だれよりもいちばんかわいいとはおおもいにならなくて。」と、王子が人魚のひいさまを腕にかかえて、そのうつくしいひたえにほおをよせるとき、ひいさまの目は、そうたずねているようにみえました。

「そうとも、いちばんかわいいとも。」と、王子はいいました。「だって、おまえはだれよりもいちばんやさしい心をもっているし、いちばん、ぼくをだいにじにしてつかえてくれる。それに、ぼくがいつかあつたことがあつて、それなりもう二どとはあえまいとおもうむすめによく似ているのだよ。ぼくはあるとき、船にのつて、難破なんぱしたことがあつた、波がぼくを、あるとうといお寺のちかくの浜にうち上げてくれた。そのお寺にはおおぜい、わかいむすめたちが、おつとめしていた。そのなかでいちばんわかい子が、ぼくを浜でみつけて、いのちをたすけてくれた。ぼくは、その子を二どみただけだった。その子だけが、ぼくのこの世の中で好きだとおもつただひとりのむすめだった。ところで、おまえがそのむすめに生きうつしなのだ。あまり似ているので、ぼくの心にのこつていたせんのむすめのすがたが、いまではどうやらとおくにおしのけられそうだ。そのむすめは、とうといお寺につかえているむすめだから、ぼくの幸運の神さまが、その子のかわりに、おまえを

ぼくのところへよこしてくれたのだ。いつまでもいつしよにしようね。」――

「ああ、あの方は、あの方のおいのちをたすけてあげたのは、このあたしだということを
お知りにならないのね。」と、人魚のひいさまはおもいました。「あたし、あの方をかか
えて海の上を、お寺のある森の所まではこんであげたのだわ。あたし、そのとき、あわの
かげにかくれて、たれかひとは来ないかみていたのだわ。あの方が、あたしよりもつと好
きだとおっしゃるそのうつくしいむすめも、みて知っている。」と、ここまでかんがえて、
人魚のひいさまは、ふかいため息をしました。人魚は泣きたくも泣けないのです。「でも、
そのむすめさんは、とうといお寺につかえている身だから、世の中へでてくることはない
と、あの方はおっしゃった。おふたりのあうことはきつともうないのね。あたしはこうし
てあの方のおそばにいる。まいにち、あの方のお顔をみている。あたし、あの方をよくい
たわつてあげよう。あの方にやさしくしよう、あたしのいのちを、あの方にささげよう。」
ところが、そのうちに、王子がいよいよ結婚することになった、おとなりの王国のきれ
いなお姫さまをお妃きさきにむかえることになった、といううわさが立ちました。そのため、
王子さまは、りっぱな船を一そう、おしたてさせになったともいいました。

こんどの王子の旅は、おもてむき、おとなりの王国を見学けんがくにいかれるということに

なっているけれど、じつは王さまのお姫さまにあいにいくのだということでした。たくさんのおともにんずの人数もきまつていました。でも、人魚のひいさまは、つむりをふって、にっこりしていました。

王子の心は、たれよりもよく、このひいさまに分かっているはずでした。

「ぼくは旅をしなければならぬよ。」と、王子は人魚のひいさまにいいました。「きれいな王女のお姫さまにあいにいくのさ。おとうさまとおかあさまのおのぞみでね。だが、ぜひともお姫さまをぼくのおよめにもらって来いというのではないよ。だが、ぼくはそれとお姫さまが好きにはなれまいよ。おまえがそれにそっくりだといった、あのお寺のきれいなむすめには似ていないだろうからね。そのうち、どうしてもおおよめえらびをしなればならなくなったら、ぼくはいつそおまえをえらぶよ。口はきけないかわり、ものをいう目をもっている、ひろいむすめのおまえをね。」

こういって、王子は、ひいさまのあかいくちびるにくちをつけました。それからながい髪の毛をいじって、その胸に顔をおしつけました。それだけでもうひいさまのこころには、人間にうまれた幸福と、死なないたましいのが、夢のようにうかびました。

「でも、おしのひろいむすめさんは、海をこわがりはしないだろうね。」と、王子はいい

ました。そのとき、ふたりは、おとなりの王さまの国へ行くはずのりっぱな船の上にいました。それから王子に、海のしけとなぎのこと、海のそのふしぎな魚のこと、そこで潜水夫んすいふのみて来ていることなどを、なにくれと話しました。でも、話のなかで、ひいさまはついほえみかけました。そうでしょう、海のそのことなら、たれがなんといつたつて、このひいさまにかなうものはないでしょうから。

月のいい晩で、舵かじの所に立っている舵とりひとりのこして、船のなかの人たちはみんな寝しずまっています。人魚のひいさまは、船のへりに腰をかけて、澄んだ水のなかを、じつとながめていました。おとうさまの御殿が、そこにみえているようにおもわれました。御殿のいちばんの高たか殿どのには、おつむりに銀のかんむりをせたおばあさまが立っていらして、はやいしおの流れをすかして、じいつとこちらの船の竜りゆうこつ骨こつをみ上げておいでになるようです。するうち、おねえさまたちが、波の上に出て来ました。そうして、かなしそうな顔で、こちらをみて、その白い手を、せつなそうにこすりました。

ひいさまは、おねえさまたちにあいずして、につこりわらいかけて、こちらは不足なくしあわせにしている話をしようとすると、そこへ、船のボーイがふしんらしく寄って来たので、おねえさまたちは水にもぐりました。それで、ボーイも、いま、ちらと白いものが

みえたのは、海のあわであつたかとおもつて、それなりにしてしまいました。

そのあくる朝、船はおとなりの王さまの国の、きらびやかな都の港にはいつていききました。町のお寺の鐘が、いつせいに鳴りだしました。そここのたかい塔で、大らつぱを吹きたてました。そのなかで兵隊が、旗を立てて、銃剣をひからせて行列しました。

さて、それから、まいにち、なにかしらお祝ごとの催しがありました。舞踏会ぶとうかいだの、宴会だの、それからそれとつづきました。でも王さまのお姫さまは、まだすがたをみせません。うわさでは、どこかとおい所の、あるとうといお寺にあずけられていて、そこで王妃たるべき人のいつさいの道を、修めておいでになるといふことでした。するうち、そのお姫さまもやつとおかえりになりました。

人魚のひいさまも、いったいどんなにうつくしいのか、はやくそのひとをみたいものだと、気にかかつていましたが、いまみて、いかにも人からの優美ゆうびなのに、かんしんしずにはいられませんでした。はだはうつくしく透すきとおるようですし、ながいまつ黒なまつ毛の奥には、ふかい青みをもつた、貞実ていじつな目がやさしく笑えみかけていました。

「あなたでしたよ。」と、王子はいいました。「そう、あなたでした。ぼくが死がいも同様で海岸にうち上げられていたとき、すくつてくださったのは。」

こう、王子はいつて、顔をあからめている花よめを、しっかり胸にかかえました。

「ああ、ぼくはあんまり幸福すぎるよ。」と、王子は、人魚のひいさまにいいました。

「最高の望みが、しよせん望んでもむだだとあきらめていたそれが、みごとかなったのだもの、おまえ、ぼくの幸福をよろこんでくれるだろう、だっておまえは、どのだれにもまさって、ぼくのことをしんみにおもってしてくれたのだもの。」

こういわれて、人魚のひいさまは、王子の手にくちびるをあてましたが、心臓はいまにもやぶれるかとおもいました。ふたりのご婚礼のあるあくる朝は、このひいさまが死んで、あわになって、海の上にくく日でしたものね。

のこらずのお寺の鐘が、かんかん鳴りわたりました。先ぶれは町じゆう馬をはしらせて、ご婚約のことを知らせました。あるかぎりの祭壇には香油が、もったないような銀のランプのなかでもえています。坊さんたちが香炉をゆすっているなかで、花よめ花むこは手をとりかわして、大僧正の祝福をうけました。人魚のひいさまは、絹に金糸の晴れの衣裳で、花よめのながいすそをささげてもちました。でも、お祝の音楽もきこえません。儀式も目にうつりません。ひいさまは、うわの空で、いちずに、くらい死の影を追いました。いっさいこの世でなくしてしまったもののおもいました。

もうその夕方、花よめ花むこは、船にのつて海へ出ました。大砲がなりとどろいて、あ
るだけの旗がひるがえりました。船のまん中には、王家ご用の金とむらさきの天幕てんまくが張
れて、うつくしいしとねがしけていました。花よめ花むこが、そこですずしい、しずかな
ひと夜をおすごしになるはずでした。

帆は風でふくれて、船は、鏡のように平らな海の上を、かるく、なめらかにすべって行
きました。くらくになると、さまざまな色ランプがともされて、水夫たちは、甲板にでて、
おどけた踊をおどりました。人魚のひいさまも、はじめて海からでて来て、この晩のよう
な華はなやかな、たのしいありさまを目にみたときのことを、おもいうかべずにはいられませ
んでした。それで、ひいさまもついなかまにまじって、おどりくるいたくなりました。ひ
いさまは、それはまるで、つばめが追われて、身をひるがえして逃げるときのような身が
るさでおどりまわりました。そのみごとな踊りぶりを、みんなやんやとさわいでほめまし
た。姫にしてもこれほどみごとに踊ったのははじめてです。おどりながら、きゃしゃな足
は、するどい刃もので切りさかれるようにかんじました。けれどそれを痛いともおもいま
せん。それよりか、胸を切りさかれる痛みをせつなくおもいました。

王子をみるのも、今夜がかぎりということを、ひいさまは知っていました。このひとの

ために、ひいさまは、親きようだいをも、ふるさとの家をも、ふり捨てて来ました。せつかくのうつくしい声もやってしまつたうえ、くる日もくる日も、はてしないくるしみにたえて来ました。そのくせ、王子のほうでは、そんなことがあつたとは、ゆめおもつてはいないので。ほんとうに、そのひととおなじ空気を吸つていて、ふかい海と星月夜の空をながめるのも、これがさいごの夜になりました。この一夜すぎれば、ものをおもうことも、夢をみることもない、ながいながいやみが、たましいをもたず、ついもつことのできなかつた、このひいさまを待つていました。船の上では、でも、たれも陽気にたのしくうかれ、真夜中まよなかすぎまでもすごしました。そのなかで、ひいさまは、ころろでは、死ぬことをおもいながら、いっしょにわらつておどりました。王子がうつくしい花よめにくちびるをつけると、王女は王子の黒い髪をいじつていました。そうして、手をとりあつて、きらびやかな天幕てんまくのなかへはいました。

船の上は、ひっそり人音もなくなりました、ただ、舵かじとりだけが、あいかかわらず、舵をひかえて立つていました。人魚のひいさまは、船のへりにその白い腕をのせて、赤らんでくる東の空をじつとながめていました。そのはじめてのお日さまの光が、じぶんをころすのだ、とひいさまはおもいました。そのときふと、おねえさまたちが、波のなかから出て

くるのがみえましたが、たれもひいさまとおなじように、青い顔をしていました。しかも、そのうつくしい髪の毛、風になびかしてはいませんでした。それはきれいに切りとられていました。

「あたしたち、髪を魔女にやってしまったのよ、あなたをたすけてもらおうとおもってね。なんでもあなたを今夜かぎり死なせたくないのだから。すると魔女が、ほらこのとおり、短刀をくれましたの。ごらん、ずいぶんよく切れそうでしょう。お日さまのぼらないうち、これで王子の胸をぐざりとやれば、そのあたたかい血が足にかかって、それがひとつになって、おさかなの尾になるの。するち、あんたはまたもとの人魚のむすめになって、海のそのあたしたちの所にかえれて、このまま死んで塩からい海のあわになるかわりに、このさき三百年生きられるでしょう。さあ、はやくしてね。王子が死ぬかあんたが死ぬか、お日さまのぼるまでに、どちらかにきめなくてはならないのよ。おばあさまは、あまりおなげきになったので、白いお髪ぐしがぬけおちておしまいになったわ。あたしたちの髪の毛が魔女のはさみで切りとられてしまったようにね。王子をころして、かえっておいでなさい。早くしてね。ほらもう、あのとおり空に赤みがさして来たわ。もうすぐ、お日さまがおあがりになるわ。すると、いやでも死ななくてはならないのよ。」

こういつて、おねえさまたちは、いかにもせつなそうにため息をつくど、波のなかにながたをかくしました。

人魚のひいさまは、天幕てんまくにたれたむらさきのとばりをあげました。うつくしい花よめは、王子の胸にあたまをのせて、休んでいました。ひいさまは、腰をかがめて、王子のうつくしいひたいに、そつとくちびるをつけました。東の空をみると、もうあけ方のあかね色がだんだんはつきりして来ました。ひいさまは、そのとき、するどい短刀のきつさきをじつとみて、その目をふたたび王子の上にもうつしました。王子は夢をみながら、花よめの名をよびました。王子のころのなかには、花よめのことだけしかありません。短刀は、人魚のひいさまの手のなかでふるえました。——でも、そのとき、ひいさまは短刀を波間なみまとおく投げ入れました。投げた所に赤い光がして、そこから血のしずくがふきだしたようにおもわれました。もういちど、ひいさまは、もう半分うつろな目で、王子をみました、そのせつな、身をおどらせて、海のなかへとび込みました。そうしてみるみる、からだがあわになつてとけていくようにおもいました。

いま、お日さまは、海の上にのぼりました。その光は、やわらかに、あたたかに、死のようにつめたいあわの上にさしました。人魚のひいさまは、まるで死んで行くような気が

しませんでした。あかるいお日さまの方を仰ぎました。すると、空の上に、なん百となく、すきとおるような神こうじゅう神こうじゅうしいもののかたちが見えました。そのすきとおるもののむこうに、船の白い帆や、空のあかい雲をみました。空のその声はそのままに歌のふしでしたが、でもそれはたましいの声で、人間の耳にはきこえません。そのすがたもやはり人間の目ではみえません。それは、つばさがなくても、しぜんとかるいからだで、ふうわり空をただよいながら上がって行くのです。人魚のひいさまも、やはりそれとおなじものになって目にはみえないながら、ただよう氣息いきのようなものが、あわのなかから出て、だんだん空の上へあがって行くのがわかりました。

「どこへ、あたし、いくのでしょね。」と、人魚のひいさまは、そのときたずねました。その声は、もうそこらにうきただよう氣息いきのなかまらしく、人間の音楽にうつしようのな、たましいのひびきのようになっていました。すると、

「大空のむすめたちのところへね。」と、ほかのただよう氣息いきのなかまがいました、
「人魚のむすめに死なないたましいはありません。人間の愛情をうけないかぎり、それをじぶんのものにするにはできません。かぎりないのちをうけるには、ほかの力にたよるほかありません。大空のむすめたちもながく生きるたましいをもたないかわり、よい行

いによつて、じぶんでそれをもつこともできるのです。（あたしたちは、あついでい国へいきますが、そこは人間なら、むんむとする熱病の毒気で死ぬような所です。そこへすずしい風をあたしたちはもつていきます。空のなかに花のにおいをふりまいて、ものをさわやかにまたすこやかにする力をはこびます。こうして、三百年のあいだつとめて、あたしたちの力のおよぶかぎりのいい行いをしつくしたあと、死なないたましいをさずかり、人間のながい幸福をわけてもらふことになるのです。お気のどくな人魚のひいさま、あなたもやはりあたしたち同様まごころこめて、おなじ道におつとめになったのね。よくも苦みをおこらえなされたのね。それで、いま、大空の氣息いきの世界へ、ごじぶんを引き上げるまでになったのですよ。あと三百年、よい行いのちからで、やがて死ぬことのないたましいがさずかることになるでしょう。」

そのとき、人魚のひいさまは、神さまのお日さまにむかって、光る手をさしのべて、生まれてはじめての涙を目にかんじました。——そのとき、船の上は、またもがやがやしはじめました。王子と花よめがじぶんをさがしているのを、ひいさまはみました。ふたりは、かなしそうに、わき立つ海のあわをながめました。ひいさまが海にはいつてそれがあわになつたことを知っているものようでした。目にはみえないながら、ひいさまは、花よめ



のひたいにせつぷんをおくつて、王子にほほえみかけました。さて、ほかの大空のむすめたちともども、そのなかながれてくるばら色の雲にまぎれて、たかくのぼって行きましました。

「すると、三百年たてば、あたしたち、こうしてただよいながら、やがて神さまのお国までものぼって行けるのね。」

「いいえ、そう待たないでも、いけるかもしれませんの。」と、大空のむすめのひとりがささやいてくれました。「目にはみえないけれど、あたしたちは、こどもたちのいるところなら、どの人間の家にもただよっています。そこで毎日、その親たちをよろこばせ、その愛^{いづく}しみをうけているいい子をつけるたんびに、そのためしときがみじかくなります。こどもは、いつ、あたしたちがへやのなかへはとんで行くかしらないのです。でも、あたしたちが、いいこどもをみて、ついよろこんでほほえみかけるとき、三百年が一年へりまします。けれど、そのかわり、いたずらな、またはいけないこどもをみて、かなしみの涙をながさせられると、そのひとしずくのために、あたしたちのためしときも、一日だけのびることになるのですよ。」

青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2005年8月18日作成

2012年5月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人魚のひいさま

DEN LILLE HAVFRUE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>